九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

前漢・新・後漢・隋唐期の中華と周辺諸国双方における敵国内勢力との外交交渉

菅沼, 愛語
京都女子大学

https://doi.org/10.15017/1917865

出版情報：九州大学東洋史論集. 45, pp.1-34, 2018-03-29. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

前漢・新・後漢・隋唐期の中華と周辺諸国双方における敵国内勢力との外交交渉

菅沼愛語

はじめに

中華諸王朝にとって北方遊牧政権などの周辺強国との関係は時として王朝の死命を制する程の重要課題であり、本稿で扱う漢代から唐代の統一中華王朝においても、匈奴・突厥・ウイグル・吐蕃などの周辺強国との外交交渉等については様々な研究がなされてきた。

例えば、内田吟風氏は、匈奴及び南匈奴に関する先駆的な研究を行い、沢田勲氏は匈奴の興隆から衰退までを概観し、匈奴の行政組織や軍事組織についても考察した。護雅夫氏は、突厥と隋唐の外交関係を両者のその時々の力関係に則った名分関係を主軸に論じ、石見清裕氏は、緻密な史料分析により、建国期の唐にとって突厥対策が政治・軍事・外交に関わる重要課題であった点を指摘した。西突厥研究に関しては、松田寿男氏が西突厥の政治的独立の時期等を推定し、内藤みどり氏は、漢籍や突厥碑文に基づき西突厥の部族組織や唐による西突厥支配などを解明した。ウイグルと唐については、羽田亨氏が主に漢文史料に基づき、ウイグルの興亡史や唐との関わりなどを論じ、林敏雄夫氏は、ウイグルの対唐政策が絹の獲得を目的とした交易重視策と分析した。山口瑞鳳氏と佐藤長氏は、漢文史料とチベット語史料を駆使

し吐蕃史研究の基礎を築いた(1)。

以上は、主として、中華王朝と周辺強国一国との間の個別の外交を研究対象とした例であるが、多国間の連動性に着目した研究としては、例えば、陳寅恪氏が、唐代の周辺諸国は、唐との接触を通じ互いに連環性を有したと推察し、古畑徹氏は、七世紀末から八世紀初の唐・新羅間の対戦と外交を、突厥や吐蕃の動向とも関連させつつ論じている。また、漢代や隋唐期の中華と周辺諸国間の外交を、主に中華側の視点から網羅的に考察したものとしては、堀敏一氏、金子修一氏らの研究がある。和蕃公主を通じた対外政策については、日野開三郎氏、藤野月子氏らの研究があり、中華内の異民族に関しては、川本芳昭氏や森部豊氏による研究がある(2)。

更に、近年では中央ユーラシア・東部ユーラシアなどの広域的な視点から、森安孝夫氏、岩尾一史氏、筆者などが、唐と複数の周辺強国（突厥・吐蕃・ウイグルなど）の間の外交関係を多角的に論考している(3)。

このように、これまでは主として、国家と国家の間の外交や、中華の内部に存在する異民族に関する研究が精力的に行われてきたが、本稿では、国家と敵対国家内勢力との間で行われた外交交渉について着目したいと思う。

中華諸王朝と周辺諸国の外交交渉を見ると、中華王朝が周辺国家に対し、「以夷制夷（夷を以て夷を制す）」の対外政策を実施していた事は、よく知られている。このような言葉は、実際に、後漢の耿秉の上奏文に見える。即ち、『後漢書』巻八九南匈奴伝によれば、南匈奴が後漢に北匈奴征伐を申し出た際、耿秉が「以夷伐夷、国家之利」と上奏し、北匈奴攻撃に賛成した。その後、後漢は南匈奴と連合し、北匈奴を大破した。つまり、南匈奴を利用した後漢の北匈奴討伐は、中華王朝サイドが明確に意図した「以夷制夷」の政策であった。

この中華による「以夷制夷」の外交政策は、漢代から唐代まで長期に亘って周辺諸国に対して施されてきたが、その形態は大まかには二つのパターンに類別される。一つ目は、ある周辺国に対して別の周辺国を攻撃させるという政策である。例えば、隋の煬帝は、大業四（六〇八）年、鉄勒に吐谷渾を征伐させた(4)。二つ目は、周辺国家の内部で対立する勢力同士を衝突させて、その国家を分裂させるという方策である。例えば、隋の煬帝は大業六（六一〇）年頃、西突

厥攻略の際、一首領の射匱可汗を嗾け君主の泥撅処羅可汗を攻撃させた(5)。

後者のパターンについては、周辺諸国、とりわけ北方遊牧政権の分立的傾向という「弱点」を利用した政策である。事実、匈奴・突厥などの北方の強大な遊牧政権は、中華諸王朝にとって大きな脅威であったが、遊牧政権は部族連合的な政治形態をとる傾向があり、各地に部族長が割拠していた。そこで漢や隋唐は、この遊牧政権の分立的な特徴を利用し、「以夷制夷」の政策によって北方の統治を分断し、その脅威を軽減したのである。

例えば、前漢は、五鳳四（前五十四）年、匈奴の呼韓邪単于が兄の致支単于に敗北した際、呼韓邪を支援して致支単于を排斥し、匈奴を東西に分裂させた(6)。後漢も、匈奴で蒲奴単于と日逐王比が対立した際、建武二十四（四十八）年に日逐王比を帰順させて匈奴を南北に分裂させ、永元元（八十九）年、南匈奴と連合し北匈奴を撃破した(7)。また、隋の文帝は突厥攻略の際、各地に分立する部族長達を懐柔し、沙鉢略可汗に対抗させて内訌を煽り、開皇三（五八三）年、突厥を東西に分裂させた(8)。このように、漢代から唐代までの中華諸王朝は、強大な遊牧政権に対して、しばしば、その国内勢力と連繋する事で弱体化を促進し、北方の脅威を取り除いていった。

しかし、こうした政策は、中華諸王朝が周辺諸国に対して一方的に仕掛けていたわけではない。実は、匈奴・突厥・ウイグル・吐蕃などの周辺国家も中華王朝に対し、類似の離間策や分断政策を仕掛けていた。例えば、隋末唐初、突厥は河北・山西等の群雄（梁師都・劉武周ら）を支援して中華の混乱を助長し(9)、更には、煬帝の孫・楊正道も隋王に擁立し定襄（内蒙古自治区）に隋の亡命政権を樹立した(10)。また、安史の乱の時、唐に援軍を派遣したウイグルは、玄宗と粛宗が相次いで崩御すると、今度は安史側に付き、唐を襲撃した。その後、代宗がウイグルを説得すると再び唐と連合し、安史の乱終息に向け、再度貢献した(11)。

このように、周辺諸国が中華王朝内に分立する群雄や反乱分子に対し、外交交渉を行い、軍隊を派遣するなどして中華の混乱や分裂を助長している点は、中華側の「以夷制夷」の政策の反転バージョンであり、中華と周辺の双方向的な視点からも興味深い事象と言える。

本稿では、国家と敵国家内のサブ勢力との間の外交交渉に注目し、①前漢・新・後漢・隋・唐という幅広い時代に焦点を当て、②中華諸王朝、北方遊牧政権（匈奴・突厥・ウイグル）及び吐蕃を含めた東部ユーラシアの広い地域を考察の対象とし、③中華王朝が、周辺諸国内のサブ勢力に対し行った外交交渉だけでなく、周辺国家が中華内のサブ勢力（反乱勢力や群雄など）に対して実施した外交交渉についても網羅的にまとめ、その特徴や傾向を簡単に考察したいと思う。

なお、このような敵対国内の諸勢力との交渉や連繋といった事象を扱う際には、外交という概念を通常の国家間の交渉から、やや拡げて捉える必要があると思われる。筆者は前稿(12)において、隋が突厥国内の諸勢力を離間する目的で諸可汗に対して実施した外交政策を事例として挙げ、国家と対立国家内勢力との外交交渉を「小外交」と呼び、考察を加えた。こうした見方は、漢代から唐代までの比較的広い時代における、統一中華王朝と周辺諸国との外交関係を見る場合においても有効と考え、本稿でも、国家と敵国内勢力との交渉に対し、「小外交」という呼称を用いることとする。

また、新の王莽の匈奴政策については、これまで主として極端な中華思想に基づく強圧的な対外姿勢が論じられてきた。しかし、王莽は、五人もの単于を擁立して匈奴の分断を画策するなど、有効とも言える外交政策を打ち出しており、これについては、あまり知られていない。実は、中華王朝において北方遊牧政権の君主を擁立したのは王莽が最初である。これは結果的に失敗に終わったが、後代での中華王朝の対外政策の先駆をなすものでもあり、注目に値しよう。本稿では、王莽の小外交にも着目する。

なお、本稿は主に中華の統一王朝を考察の対象となし、中華の長期固定的な分裂期である魏晋南北朝時代などでの外交政策については、いずれ別稿で取り上げたいと思う。

本稿は二章から成り、第一章で、まず中華諸王朝（前漢・新・後漢・隋・唐）から周辺国家（匈奴・突厥）に対して行われた小外交を取り上げ、次いで、第二章で周辺諸国（匈奴・突厥・ウイグル・吐蕃など）が中華内の諸勢力（群雄や反乱勢力）に対し実行した小外交について検討する。また、本稿は『史記』『漢書』『後漢書』『隋書』『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』『冊府元亀』『文苑英華』『全唐文』から、小外交に関する事柄を抽出し、系統的に図表にまとめ、提示

した。前漢・新・後漢における中華王朝と周辺諸国（匈奴・東越）の小外交の推移・内容・成否については【年表1】、隋唐における中華王朝と周辺諸国（突厥・ウイグル・吐蕃など）の小外交の推移や成否に関しては【年表2】、周辺諸国と交渉した中華の群雄・反乱勢力の拠点・活動時期・交渉相手に関しては【表1】、漢代から唐代の中華王朝（前漢・新・後漢・隋・唐）と周辺諸国（匈奴・突厥・ウイグル・吐蕃など）の小外交については【表2】、周辺諸国と交渉した中華内の群雄や反乱者の活動地域に関しては【地図】、匈奴単于の系図は【系図】に各々整理した。（本稿では、東突厥のことを適宜、突厥と記す。また、ルビに関しては標準的なものを用いた）

一　中華諸王朝（前漢・新・後漢・隋・唐）からの周辺諸国（匈奴・突厥）に対する小外交

本章では、前漢・新・後漢・隋・唐の中華王朝から、匈奴・突厥などの周辺国家に対して行われた小外交を取り上げ、時代ごとに見ていく。

前漢の高祖が、前二〇〇年に平城（山西省）の白登山で匈奴に敗北後、歳幣の贈与や和蕃公主（宗室女）の降嫁により和睦して以来、中華王朝にとって北方遊牧民族は絶えざる脅威となった。ただ、匈奴や突厥は概ね遊牧部族の連合体であり、各地に部族長が割拠したため、単于や可汗の死後、後継者争いが勃発する事もままあった。それゆえ、前漢から唐までの中華諸王朝は、匈奴・突厥に内紛の兆しが現れると、軍事力の行使と並行して「以夷制夷」の外交政策も行い、効率よく、その分裂と混乱を促進した。ここでは、中華が匈奴・突厥に対して仕掛けた離間策に焦点を当て、その成否を見る。（年表1・年表2・表1・系図参照）

（一）前漢：宣帝・元帝による呼韓邪単于の支援と匈奴の東西分裂

ここでは、漢による呼韓邪単于の支援、それによって引き起こされた匈奴の東西分裂について、『漢書』巻九四匈奴伝

などに依り、その経緯を確認したいが、これは中華側が周辺国に仕掛けた「小外交」の最初の事例である。

匈奴では、五鳳元（前五十七）年頃、五人の単于が並立する内紛状態となった。このとき、呼韓邪単于が対立する単于を討滅もしくは降伏させるなどして匈奴を一旦統合したが、五鳳二（前五十六）年、兄が自立して致支単于となり、五鳳四（前五十四）年、呼韓邪を撃破し、単于庭に都を置いた。

このため、敗北した呼韓邪単于は、甘露元（前五十三）年、漢に遣使し息子を入侍させ、宣帝に支援を求めた。すると致支単于もこれに対抗し、漢に息子を入侍させた。その後、呼韓邪が甘露三（前五十一）年に初めて入朝すると、宣帝は呼韓邪に莫大な贈物を授けて厚遇し、甘露四（前五十）年、呼韓邪単于と致支単于が各々使者を入朝させ奉献すると、呼韓邪の使者を致支の使者より優遇した。呼韓邪は、次代の元帝からも引続き支援と庇護を受けた。

このように漢が呼韓邪を強力に支援したため、致支単于は西方に移住した。なお先行研究は、西に移動した致支単于を西匈奴、呼韓邪単于を東匈奴と呼び区別している。

致支単于は、建昭三（前三十六）年、西域都護の甘延寿に攻撃され、誅殺された。唯一の匈奴単于となった呼韓邪は漢に臣従し、竟寧元（前三十三）年正月、三度目の入朝時、元帝から王昭君を妻として賜った[13]（系図）。呼韓邪の死後、息子達も漢に臣従し、新の始建国三（十一）年、雲中郡の益寿塞（内蒙古自治区）を襲撃するまで、約六十年間、入寇しなくなった（後述）。

以上のように呼韓邪単于と致支単于が対立すると、宣帝と元帝は、単于庭を追われた呼韓邪を支援し致支単于に対抗させた。その結果、匈奴は東西に分裂したのである。

（二）新：王莽の匈奴に対する「以夷制夷」政策

王莽は、新の皇帝に即位後、匈奴への「以夷制夷」策として、短い帝位の間に五人もの単于を擁立している。「はじめに」でも述べた通り、中華王朝において北方遊牧政権の君主を擁立したのは王莽が最初であり、これは特筆に値する。

前漢では、匈奴人が推戴した単于（呼韓邪単于）を追認した事はあるが、匈奴の単于を擁立した事はなかった。つまり、王莽の単于擁立は斬新な試みであり、積極的な外交政策であったとも言えよう。本節では、『漢書』匈奴伝、巻九九王莽伝、『資治通鑑』に基づき、匈奴への王莽の小外交を取り上げる。（年表1・系図参照）

（1）匈奴分断策としての五人の単于擁立

王莽は、新を樹立した始建国元（九）年、第十八代・烏珠留単于に対し、漢の授けた匈奴単于璽を返還させ、新匈奴単于章と交換して降格し、匈奴の怒りを招いた。そこで、王莽は呼韓邪単于の子孫十五人を単于に擁立して匈奴を分断しようと計画し、始建国三（十一）年、呼韓邪の子で右犁汗王の咸、咸の子の助と登を誘き寄せ、実際に、咸を孝単于、助を順単于に擁立した（系図）。これを知った烏珠留単于は怒り、雲中の益寿塞を攻め、吏民を殺害した。前述の通り、匈奴は呼韓邪の入朝以来約六十年間入寇しなかったが、ここに入寇を再開し、官吏・人民・家畜等を略奪した。このため、孝単于・咸は匈奴に帰り、順単于・助も病死したので、王莽は、登を新たに順単于に擁立した。ところが、匈奴の捕虜達が、登の兄弟の角が幾度も入寇していると供述したため、王莽は怒り、始建国四（十二）年、諸蛮夷を集め、順単于・登を処刑し見せしめとした(14)。

こうして三人の単于擁立は失敗したが、王莽は、その後も匈奴への対抗策として単于擁立を企て、天鳳五（十八）年、匈奴の大臣・須卜当（第十五代・復株絫単于と王昭君の女婿）を長安に拉致し、須卜単于に擁立した（系図）。また、王莽は、天鳳六（十九）年、第二十代・呼都而尸単于を誅殺して須卜単于を匈奴の単于に据えるため、匈奴への大軍派遣も計画したが、軍備が整わなかった。しかし、呼都而尸単于が須卜単于の擁立を知って激怒し、入寇を激化させた事に加え、天鳳五年、山東で樊崇（後の赤眉軍）の乱が勃発したため、新は内憂外患に苦戦する事となった。

地皇二（二十一）年、須卜単于が病死すると、王莽は、須卜単于の息子・奢に対し、自分の娘・陸逸任を嫁がせ（系図）、派兵して奢を匈奴の単于に推戴する計画も立てた(15)。しかし、地皇四（二十三＝更始元）年、更始帝の軍が長安を攻撃し、王莽は殺されて新も滅亡した。

(2) 北方遊牧政権の君主擁立の有効性

以上のように、王莽は、匈奴の単于の一族や大臣を自己の傀儡単于に擁立し、匈奴の分断や掌握を画策した。また、王莽は、自分の娘婿を匈奴の単于に推戴するため軍勢の派遣も計画した。中華王朝において、北方遊牧政権の君主を擁立したのも、北方有力氏族の弱小の血縁者に皇帝の実の娘（真公主）を降嫁させたのも、王莽が最初であった。この二点は、中華史上、注目に値する試みであろう。

なお、王莽による単于擁立は、五度試みられたものの、五度とも軍勢派遣を伴っていない。しかも、王莽が須卜当と奢を擁立時、赤眉の乱が勃発しており、国力の低下・衰微が甚だしかった。このため、軍事力と国力を伴わない王莽の「以夷制夷」政策は、効力を持たなかったばかりか、逆に、匈奴を怒らせ入寇を激化させた。

王莽の場合は失敗に終わったが、こうした政策は巧く活用すれば、かなり有効な外交政策になった可能性もある。その可能性を示すものが、後年、隋の文帝が突厥への分断策として行った可汗擁立と公主降嫁の対外政策である。中華再統一後、文帝は突厥を離間するため、第八代の都藍可汗の従弟で、弱小勢力であった染干に対し、安義公主（宗室女）を嫁がせ、啓民可汗に冊立すると、軍隊も派遣して都藍可汗を排除し、啓民可汗を突厥の可汗に推戴した（後述）。北方遊牧政権内の弱小勢力を、単于（もしくは可汗）への擁立と公主降嫁によって傀儡君主に推戴するという外交政策は、文帝のように軍事力と国力を伴った上で実行すると、効果を発揮すると言えよう。

(三) 後漢：光武帝による南単于の懐柔と匈奴の南北分裂

匈奴は、新の崩壊の混乱に乗じ、後漢の建国前後より、五原（内蒙古自治区）で漢皇帝を称した盧芳や河北の彭寵を支援し、後漢軍を幾度か撃破した（後述）。建国間もない光武帝にとって、匈奴は群雄とも連繋した点で脅威となった。しかし、匈奴では建武二十二（四十六）年、第二十代の呼都而尸単于の死後、内訌が勃発し、光武帝はこの機に乗じ匈奴を南北に分裂させた。ここでは、『後漢書』巻一光武帝紀、南匈奴伝などに依り、匈奴への後漢の小外交と匈奴の南北

分裂について見ていく。（系図参照）

匈奴では、呼韓邪単于（第十四代）の遺言により単于位が兄弟相続になったが、呼都而尸単于は、自分の子に位を継がせるため弟を殺し、呼都而尸の死後、その息子達（烏達鞮侯・蒲奴）が代々単于となった。このため、第十八代の烏珠留単于（呼都而尸の兄）の息子・日逐王比は反発し、建武二十四（四十八）年、配下の八部族の四、五万人を率い五原塞に到来すると、光武帝に対し、後漢の防壁となり北虜（匈奴など）の侵入を防ぎたいと請願した。光武帝がこれを許可したので、日逐王比は祖父の呼韓邪に倣って呼韓邪単于を称し、雲中・五原等に移住した。これ以降、後漢は、中国北辺に移住した日逐王比を南匈奴（南単于）、モンゴル高原の蒲奴単于を北匈奴（北単于）と呼んで区別した。

後漢は、南匈奴を利用して北匈奴を攻撃もしくは牽制し、「以夷制夷」の政策によって北方の脅威の軽減につとめ、永元元（八十九）年には征西将軍の耿秉、車騎将軍の竇憲が南匈奴と連合し、北匈奴を撃破した(16)。後漢による南匈奴を用いた北匈奴の牽制・征伐は、「以夷制夷」の典型的な事例であろう。

（四）隋：文帝と煬帝による突厥攻略のための小外交

隋の建国当初、突厥がモンゴル高原から中央アジアに及ぶ広大な領域を支配し、大きな脅威となった。ただ、部族連合的な国家体制をとる突厥では君主に相当する大可汗がモンゴル高原に牙庭を構え、各地に小可汗という部族長が分立した。そこで隋は突厥の小可汗らに対し小外交を仕掛け、内訌を煽った。突厥に対する隋の小外交については前稿(17)で論じたので、ここでは概略のみを述べる。（年表2参照）

（1）文帝による突厥国内勢力との小外交と突厥の東西分裂（開皇元年～三年）

開皇元（五八一）年～開皇三（五八三）年、文帝は遠交近攻策を実行し、達頭（タルドウ）可汗・処羅侯（しょらこう）・染干（処羅侯の子）・阿波（あは）可汗に各々遣使し、突厥の離間を図った。この小外交が奏功し、開皇二（五八二）年、六代目の大可汗・沙鉢略可汗が大々的に入寇した際、文帝は達頭可汗を懐柔して撤退させ、突厥の攻撃を凌いだ。また、開皇三（五八三）年、沙鉢

略が再入寇した際、文帝は阿波可汗を懐柔し、突厥を東西に分裂させた。つまり、この策は極めて大きな成功であった。

(2) 文帝の対突厥離間策を目的とした小外交と親隋可汗の擁立（開皇十七年～仁寿三年）

文帝は、中華再統一（五八九年）後の開皇十七（五九七）年、再び突厥に離間策を試みた。当時、漠北に大可汗の都藍可汗、西方に達頭可汗、北方に染干が各々勢力を有していたが、文帝は開皇十七年、弱小の染干に安義公主を嫁がせ、都藍可汗に対抗させた。都藍可汗が達頭可汗と連合し染干を攻めると、文帝は染干を啓民可汗に冊立し、武力行使も伴い、都藍可汗と達頭可汗を排斥した。その結果、仁寿三（六〇三）年、啓民可汗は東突厥の大可汗となり、以後入寇せず、隋は北からの脅威を取り除いた。

(3) 煬帝による西突厥の内紛助長のための小外交（大業六年頃～大業七年）

煬帝は西突厥攻略を試み、大業六（六一〇）年頃、一首長の射匱可汗に対し、冊立と通婚を条件に、大可汗の泥撅処羅可汗を攻撃させた。射匱可汗に敗北した泥撅処羅可汗が隋に亡命すると、煬帝は、今度は泥撅処羅可汗を支援し、信義公主（宗室女）を嫁がせ、旧領の回復も計画するが、高句麗遠征の失敗や煬帝自身の暗殺により、計画が実現する事はなかった。

(4) 煬帝の東突厥に対する離間を目的とした小外交とその失敗（大業十一年）

煬帝は三度の高句麗遠征（六一二～六一四年）に失敗後、東突厥の弱体化を画策し、大業十一（六一五）年、第十二代の始畢可汗（しひつ）の弟・叱吉設（しつきらシャド）に対し南面可汗への冊立と公主降嫁を提案したが、叱吉設がこれを拒絶し、離間策は失敗した。のみならず、隋の陰謀を知った始畢可汗は怒り、数十万の騎兵を率い、北巡中の煬帝を雁門で包囲した。離間策が失敗した要因としては、三次に亘る高句麗遠征が失敗した事が大きい。外交の成否は、国力わけても軍事力に裏打ちされるため、外征に失敗した隋を突厥が侮った結果と思われる。

（五）唐：太宗による東突厥大可汗の甥の懐柔と東突厥の討滅

唐の太宗は東突厥を滅ぼす際、十四代目の大可汗・頡利可汗と、その甥・突利可汗の間を離間して突厥の内紛を煽り、まずは外交を駆使し東突厥を内から切り崩した後、討伐軍を派遣し、軍事力行使により東突厥を討滅した(18)。ここでは、『旧唐書』巻一九四突厥伝、『新唐書』巻二一五突厥伝、『資治通鑑』巻一九一、『冊府元亀』巻九八一などに依拠し、突利可汗に対する太宗の小外交をまとめる。（年表2参照）

突利可汗は、十二代目の大可汗・始畢可汗の嫡子で、奚・霫などの東方諸族を管轄した。武徳七（六二四）年、頡利可汗が突利可汗と共に大軍を率いて入寇した際、秦王の李世民（後の太宗）は突厥を離間するため、突利可汗に間者を派遣し、戦闘意欲を削いだ。このため頡利可汗は唐軍と戦えず、突利可汗を唐に派遣し講和を求めた。その際、李世民は突利可汗と兄弟の契りを交わし(19)、東突厥攻略のための布石を打った。その後、突利可汗は奚・霫などの統轄に失敗し、貞観元（六二七）年、薛延陀などの討伐にも失敗したため、頡利可汗に監禁され鞭打たれた。突利は頡利可汗を恨み、貞観二（六二八）年、兄弟の契りを結んだ太宗に対し救援を請願した。貞観三（六二九）年、太宗が突厥討伐軍を派遣すると、突利可汗・郁射設・蔭奈特勤らが配下を率い、唐に投降した(20)。唐軍は貞観四（六三〇）年、頡利可汗を捕縛し、東突厥を討滅して北方の脅威の実質的な排除を成し遂げた。

以上のように、中華王朝は北方遊牧政権に対し、「以夷制夷」の政策を展開して内紛を助長し分裂や滅亡を促した。しかし、新の王莽や高句麗遠征失敗後の煬帝の事例に見られるように、武力や国力を伴わない場合、離間策も効果がないばかりでなく、逆に周辺諸国を怒らせて入寇を激化させ、中華側の命取りともなったようである。

二　周辺国家からの中華諸王朝に対する小外交

「はじめに」でも指摘したように、周辺国から中華へも離間策や分断政策が多く実施され、しかも、それは前漢から北宋の中華統一まで長期に亘って行われていた。そこで、本章では、漢から唐までの周辺諸国（匈奴、突厥など）が、中華王朝内の反乱分子や、地方に割拠した群雄などに対して行った「小外交」に着目する。

実は、周辺諸国からの小外交の萌芽は、案外古く、前漢による匈奴分裂策よりも先に、周辺諸国側から前漢の反乱勢力に対し、外交交渉や援軍派遣がなされていた。即ち、前漢で呉楚七国の乱（前一五四年）が勃発した際、匈奴は反乱軍の趙に対し援軍の派遣を約しており、また、南方でも東越が呉に援軍を派遣していた。

後漢初期には匈奴が河北等の群雄に対し、隋末唐初には突厥が河北・山西等の群雄に対し、安史の乱（七五五～七六三年）が勃発後の唐では、ウイグルや吐蕃が反乱軍や反側藩鎮に対し、派兵などの支援を行っていた。このように、前漢から唐代まで匈奴・突厥・ウイグル・吐蕃といった中華周辺の強大な国家が、好機と見れば中華王朝の内にある反乱勢力と小外交を展開し、時には軍事的支援などにより中華王朝を内側から切り崩そうとした。

以下では、前漢から唐にかけて周辺諸国が中華に対して行った小外交の様相を時代順に見ていく。なお、今回は中華の統一王朝を考察の対象とし、長期固定的な分裂期である魏晋南北朝や五代十国については取り上げない。

（一）前漢：匈奴・東越と呉楚七国の乱

景帝三年（前一五四年）、呉楚七国の乱の際、匈奴や東越は反乱軍と結託し、派兵を試みた。実は、中華よりも先に周辺国が小外交を仕掛けている点は興味深いが、これについては、あまり注目されていない。そこで、匈奴と東越の小外交について、『史記』巻五〇楚元王世家、巻一〇六呉王濞伝、巻一一〇匈奴伝、巻一一四東越伝などに基づき、その経緯

を見る。（年表1、表1、地図A参照）

（1）匈奴の趙に対する小外交

呉楚七国の乱の時、趙王遂は呉・楚と連繋し叛旗を翻すが、このとき匈奴に連合を申し入れ、漢の辺境地帯を襲撃するよう誘った。匈奴は趙に呼応し派兵する計画であったが、邯鄲が漢軍に七ヵ月も包囲され、呉と楚も漢軍に敗北し西に進撃できない事を知ると、出兵をやめ、辺境地帯に侵入しなかった[21]。

なお、燕も匈奴と盟約していたため、反乱軍の首領・呉王濞は燕王に対し、匈奴の軍を率いて長安に進撃するよう命令した[22]。しかし、燕は反乱には与しなかった。

（2）東越の呉に対する小外交と援軍派遣

呉王濞は蜂起の際、南方の閩越や東越に派兵を要請した。閩越は出兵しなかったが、東越は呉に援軍を派遣した。しかし、呉王が漢軍に敗北し、東越に逃亡すると、東越は呉王濞を殺害し漢からの処罰を免れた[23]。

以上のように、呉や趙は叛旗を翻すにあたり、呉が隣接する閩越と東越、趙が近接する匈奴に援軍を要請した。また、反乱軍には加わらなかったが、燕も、この時期、隣接する匈奴と盟約を結んでいた点も注目に値する。

（二）後漢初期：匈奴から群雄（彭寵と盧芳）に対する小外交

新の末期から後漢の建国期、中華が混乱すると、匈奴が、北辺に蜂起した彭寵と盧芳を支援し、派兵した[24]。ここでは後漢の建国前後、匈奴が群雄に対して仕掛けた小外交と、後漢側の対応について、『後漢書』光武帝紀、巻十二彭寵伝、盧芳伝などに依りつつ見ていく。（年表1、表1、地図A参照）

（1）彭寵の反乱と匈奴の軍事支援

漁陽（河北省）の太守・彭寵は、建武二（二十六）年、光武帝への不満から蜂起した。このとき彭寵が匈奴に美女や繒綵を贈ると、呼都而尸単于は七、八千騎を派遣した。彭寵は建武三（二十七）、薊城（現北京）を陥落させて燕王を称

し、建武四（二十八）年、匈奴の二千餘騎と共に琢郡の漢軍を攻撃したが、後漢の耿舒に撃退された。この敗北が痛手となり、建武五（二十九）年、彭寵は暗殺された(25)。

（2）匈奴による盧芳の擁立と軍事支援

安定郡（寧夏回族自治区）の盧芳は、漢の武帝の曾孫・劉文伯を称し、曾祖母が匈奴の谷蠡渾邪王の姉であると称すると、建武元（二十五）年、叛旗を翻し、匈奴や西羌と連繋した。呼都而尸単于は盧芳を匈奴に迎え入れて漢皇帝に擁立すると、建武五（二十九）年、盧芳を帰国させて五原郡の九原縣を都とした。盧芳は五原・雲中等の五郡を略奪し、守令を置き、匈奴と共に北辺を襲撃した。これに対し、光武帝は建武六（三十）年、帰徳公の劉颯を匈奴に派遣し和親を求めたが、単于は盧芳と連繋し入寇を続けた。即ち、建武六年、盧芳の将・賈覧が匈奴騎兵を率い代郡太守の劉興を攻め殺した。建武九（三十三）年六月、大司馬の呉漢が高柳（山西省）で盧芳の将・賈覧を攻めた際には、匈奴騎兵が賈覧を掩護し後漢軍を撃破した。同年八月、驃騎大将軍の杜茂が繁時（山西省）で盧芳の将・尹由を攻撃したが、匈奴の一万餘を率いた賈覧が杜茂を撃退した。しかし、建武十（三十四）年、呉漢が賈覧・匈奴連合軍を撃破した(26)。

光武帝は対匈奴戦に苦闘したが、国内統一戦は順調に進み、建武十年に隴右、建武十二（三十六）年に蜀を平定した(27)。一方、盧芳は雲中攻撃に失敗し、建武十三（三十七）年、匈奴に亡命した。その後、盧芳は一旦高柳に帰還し後漢への降伏を試みたが、建武十八（四十二）年、再び匈奴に亡命し、十数年間匈奴に滞在後、病死した(28)。

（三）隋末唐初：東突厥による群雄への支援

隋末の乱が勃発すると、突厥が、河北・山西等の群雄（梁師都・劉武周・竇建徳・劉黒闥ら）を支援し、煬帝の孫（楊正道）も隋王に擁立した。ここでは突厥の支援を受けた群雄の中でも典型的な事例のみを述べるので、詳細については年表2、表1、地図Bを参照されたい。

(1) 河北・山西等の群雄への支援

河北・山西等で蜂起した群雄は突厥と交渉し援軍などを仰いだ(年表2、表1)。例えば、大業十三(六一七)年、梁師都は突厥の十二代目の大可汗・始畢可汗から大度毗伽可汗・解事天子の称号を授かり突厥と連繋し、劉武周も始畢可汗から定楊可汗・定楊天子の称号を授けられ、突厥と連合し隋軍を撃破した[29]。突厥の大可汗が、中華内の群雄に対して、可汗や天子の称号を授与した点は興味深い。

(2) 李淵への支援

李淵(後の唐高祖)も、大業十三(六一七)年六月から七月、軍司馬の劉文静を突厥に派遣し、財帛・金宝という見返りを約束して、始畢可汗より騎兵二千・馬千匹を獲得し[30]、隋軍や他の群雄に対抗した。

(3) 煬帝の孫(楊正道)の隋王への擁立

十三代目の大可汗・処羅(しょら)可汗は、武徳三(六二〇)年、煬帝の孫・楊正道を隋王に推戴し、定襄に隋の亡命政権を樹立した。突厥に亡命した中国人一万が楊正道を戴き、隋の暦を用い百官を置いて定襄に住んだ[31]。

(4) 突厥の小外交に対する唐の反撃

突厥は隋末から唐初にかけ、河北・山西など突厥と隣接する地域を活動領域とする群雄に対し、小外交を行い、中華の混乱を助長し主導権を握った(表1、地図B)。このため、突厥の策動は建国直後の唐にとり脅威となった。唐の太宗は、東突厥の第十四代・頡利可汗が、和平を請願後も梁師都を支援したため、貞観四(六三〇)年、東突厥を滅ぼした[32]。

以上のように、中華で王朝が交代すると、北方遊牧政権が、中華の北方で挙兵した群雄を支援し、時には前王朝の皇族を擁立し新王朝を圧迫するという構図がよく見られる。

先述の通り、後漢建国期にかけて、匈奴が、河北の彭寵や五原の盧芳を軍事的に支援し、盧芳を漢皇帝に擁立して、後漢を攻撃した。そして、隋末唐初には、突厥が河北・山西等の群雄を支援し、煬帝の孫・楊正道を隋王に推戴した。

ちなみに、同様な事象は中華分裂期においても見られ、突厥の四代目の大可汗・他鉢(タトパル)可汗は、北斉が滅亡した際(五

七七年)、北斉の皇族・高紹義を斉帝に擁立して幽州を襲撃し、また、六代目の大可汗・沙鉢略可汗は、隋の建国時(五八一年)、北斉の営州刺史・高宝寧と連合し北辺を攻撃した(33)。更に、後年の出来事であるが、五代でも後周の広順元(九五一)年、太原に自立した後漢の皇族・劉崇が北漢を樹立すると、遼はこれを支援した。北漢は遼の強力な後ろ盾を背景に、北宋の太平興国四(九七九)年に滅ぼされるまで存続し、後周と北宋に脅威を与えた(34)。

このように、中華で王朝交代が起こる混乱期に、蜂起した近隣の群雄や亡命してくる旧皇族を支援する事で匈奴・突厥などの北方遊牧政権は中華に干渉し、混迷を助長する側面もあった。

(四)唐:安史の乱以後、周辺諸国(ウイグル・吐蕃)が仕掛けてきた小外交

安史の乱(七五五~七六三年)以降、安史勢力や反側藩鎮が唐の国内に半独立政権を樹立した。このため、ウイグル・吐蕃などの周辺国家が反乱分子や反側藩鎮と連繋し唐に対抗した。本節では、安史の乱後、ウイグル・吐蕃などの周辺諸国が唐国内の反乱勢力や反側藩鎮に対し行った小外交を見ていく。(年表2、表1、地図C参照)

(1)ウイグルの安史勢力(史朝義)に対する小外交

ウイグルは、安史の乱の時、当初は唐に援軍を派遣し安史軍を撃破したが、宝応元(七六二)年、玄宗と粛宗が相次いで崩御すると、安史勢力の首領・史朝義と連繋し、唐の北辺を襲撃した。本節では、『旧唐書』巻一九五廻紇伝、『新唐書』巻二一七回鶻伝、『資治通鑑』などに依拠しつつ、史朝義に応じ入寇したウイグルの動向を見ていく。

ウイグルは、至徳元(七五六)年~乾元二(七五九)年、唐に加勢して安史軍を撃破し、長安や洛陽の奪還に貢献した。しかし、安史の乱末期の宝応元(七六二)年建巳月(四月)、玄宗と粛宗が相次いで崩御すると、このとき洛陽を掌握していた史朝義は、ウイグルに遣使し、相次ぐ皇帝の崩御により、唐は主君が不在で混乱しているので、入寇し府庫を略奪するよう促した。ウイグルの第三代・牟羽可汗は史朝義の誘いに応じ、十万の軍を率いて唐に侵攻すると、単于都護府を略奪した(35)。

これに対し、新帝の代宗は、牟羽可汗の妻が僕固懐恩の娘であったため、懐恩に可汗を説得させウイグルを味方に付けると、連合して史朝義を撃破し、宝応元年十月、洛陽を奪還した。史朝義は河北に逃走したが、唐・ウイグル連合軍がこれを追撃したため、広徳元（七六三）年正月、敗残の史朝義は自殺し、安史の乱は終息した。代宗は、牟羽可汗を内殿で謁見し絁二百段を賜り、その後、宣政殿で可汗に称号を追加し、可汗・諸都督・ウイグルの内外の宰相らに各々実封二千戸（二万戸とも）を授け、諸都督らを国公に封じ、ウイグルの君臣に広く褒賞を授け、功績に報いた[36]。

（2）僕固懐恩の乱と周辺諸国（吐蕃・ウイグルなど）

安史の乱が終息した翌年の広徳二（七六四）年から永泰元（七六五）年にかけて、朔方節度使の僕固懐恩が蜂起し、吐蕃・ウイグル・党項・羌などの軍を率いて襲来し、唐は再び内乱と外圧の危機に曝された。本節では、『旧唐書』巻一二一僕固懐恩伝、巻一九六吐蕃伝、『新唐書』巻二一六吐蕃伝、巻二二四僕固懐恩伝、『資治通鑑』などに基づき、懐恩に応じて出撃した吐蕃・ウイグルの動向をまとめる。

僕固懐恩は鉄勒僕骨部出身の蕃将で、朔方節度使・郭子儀の配下として、安史の乱の際、ウイグル軍を率い安史軍と戦った。また、ウイグルが史朝義に唆され入寇した際、懐恩は可汗を説得し唐と連合させ、史朝義を撃破したが、安史の乱後、ウイグルと通じて反乱を企てていると讒言されたため、霊武（寧夏回族自治区）で蜂起した。広徳二（七六四）年、懐恩は吐蕃・ウイグルの軍勢十万を率い邠州・奉天（以上陝西省）などを攻撃した。このため代宗は郭子儀に懐恩を撃退させた。しかし、懐恩は吐蕃・ウイグルに再入寇を促すと、永泰元（七六五）年、吐蕃・ウイグル・党項・羌・渾（吐谷渾）・奴剌の二十餘万（数十万とも）の軍勢を率い、奉天・鳳翔（陝西省）などを襲撃した。郭子儀が再度出撃し、懐恩の軍と対峙するが、同年九月、懐恩が急死すると、吐蕃とウイグルが指揮権を巡り対立した。そこで郭子儀はウイグルと連合し、吐蕃軍を撃退した。吐蕃の撤退後、羌・渾は唐の李抱玉に降伏し、僕固懐恩の乱と、それに伴う周辺諸国の軍勢の侵攻は終息した。なお、乱の終盤で反乱軍から寝返り、唐に加勢したウイグルに対しては、郭子儀が纏頭の絁三千匹を贈り、代宗も繒絁十万匹と多くの贈物を授け、功に報いた[37]。

ここで、吐蕃・ウイグルが僕固懐恩の出撃要請に応じた思惑について少しだけふれる。吐蕃は、安史の乱終息後の広徳元（七六三）年十月、長安を占領した[38]。それゆえ吐蕃は再度の長安進攻を画策し、懐恩の誘いに応じたとの見方もある[39]。ウイグルは前述の如く、史朝義に呼応し入寇したが、その後、唐に寝返って史朝義を討ち、莫大な褒賞を獲得した。そのため今回も唐と反乱側を天秤にかけ、苦境の唐からの報酬を期待したのかも知れない。実際、ウイグルは唐から繒綵十万匹などの褒美を獲得し、十分な実入りも得ている。

（3）ウイグルによる反側藩鎮（盧龍節度使朱滔）の支援

徳宗が即位直後より藩鎮に対し強硬策で臨んだため、建中二（七八一）年～興元元（七八四）年、盧龍・成徳・魏博・淮西などの節度使が蜂起した。このとき、ウイグルの第四代・天親（てんしん）可汗は盧龍節度使の朱滔に援軍を派遣した。本節では『資治通鑑』巻二二九などに依拠し、ウイグルが朱滔に味方して派兵した経緯と背景を見る。

朱滔は、建中四（七八三）年十二月、范陽の歩騎五万・ウイグル兵三千などを率いて河間（河北省）を出撃し、興元元（七八四）年正月、貝州（河北省）を包囲し、諸縣を略奪した。一方、長安では建中四年十月、朱滔の兄・朱泚が反乱を起こし、徳宗は奉天に亡命した。朱滔が朱泚との合流を図り、ウイグル軍と共に南下を開始したため、窮地に陥った唐は、朱滔と連合して蜂起した成徳節度使の王武俊らを赦し、興元元年五月、王武俊と連合し朱滔を撃破した。このとき朱滔麾下のウイグル軍も敗走した[40]。

なお、ウイグルが朱滔を支援した背景には、建中元（七八〇）年八月に起こった唐によるウイグル使節殺害事件があったと考えられる。建中元年、振武軍使の張光晟がウイグルの使者・突董（天親可汗の叔父）を殺し、馬や絹錦を没収した[41]。可汗はこれを恨み、唐への報復のため朱滔に派兵したと思われる。

（4）朱泚の乱：吐蕃と朱泚の密約

朱泚の乱（七八三～七八四年）の時、吐蕃は、当初、唐に味方し、唐と連合して朱泚軍を撃破したが、その後、朱泚から賄賂を得て撤退した。ここでは、『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』などに依り、吐蕃の動向と思惑について

簡単に見ておく。

建中四（七八三）年十月、朱泚が長安で蜂起し、徳宗は奉天に逃亡した。このとき吐蕃が徳宗に対し、援軍の派遣を申し出たため、徳宗は吐蕃と盟約（奉天盟書）を交わし、毎年絹一万匹を授ける事と安西・北庭を割譲する事を条件となして、吐蕃に対し援軍派遣と長安奪回を請願した。吐蕃は唐軍と連合すると、興元元（七八四）年四月、武功の武亭川（陝西省）で朱泚軍を撃破した。しかし、興元元年五月、朱泚が吐蕃に金帛を贈賄すると、吐蕃軍は撤退した(42)。

このように、吐蕃は唐の内乱に乗じ、唐と反乱軍とを天秤にかけ、より有利な条件の勢力に靡き、中華の混乱を助長した。なお、先述の如く、ウイグルは、この頃、朱泚の弟・朱滔と連合し河北を攻撃していた。それゆえ唐は、国内で複数の反側藩鎮、国外からもウイグルに圧迫され、四面楚歌の悪状況に陥る事を危惧し、吐蕃に対し領土割譲など破格の条件を提示し、連合を試みたと思われる。

(5) 劉闢の乱：劉闢と通好する吐蕃

憲宗が即位した翌年の元和元（八〇六）年正月、剣南西川節度使の劉闢が四川で反乱を起こした(43)。このとき劉闢は吐蕃と通好し、唐もそれを察知し吐蕃の侵攻を懸念していた(44)。そのためもあり、憲宗は直ちに派兵し、同年九月、乱を平定した。唐の討伐軍派遣が迅速だったためもあり、劉闢の乱の際、吐蕃が劉闢に援軍を派遣する事はなかった。ただ、劉闢は敗北後、吐蕃への逃走を図っている。しかし、唐軍は劉闢を追撃・捕縛すると処刑した(45)。唐は、安史の乱の時のウイグル、僕固懐恩の乱の時の吐蕃・ウイグル、朱滔の乱の時のウイグルが、反乱軍と連繋し唐を攻撃したため、吐蕃が劉闢と連合して唐に侵攻する事を憂慮し、乱の早期鎮圧に尽力したのであろう。

本章で見たように、周辺諸国は中華王朝が内乱や王朝末期などで衰退・混乱した時期に、群雄や反乱勢力と連繋し、派兵などの支援を行い、辺境地帯ばかりか時には都の近くにまで入寇する事もあった。とはいえ、前漢の呉楚七国の乱の時、呉や趙など反乱軍の側が匈奴や東越に援軍を要請した事からも明らかなように、最初は、中華内の反乱勢力が周辺諸国に助力を乞うたのが、中華内に周辺国家の軍を招き入れる契機であった。

また、周辺諸国は中華の反乱や王朝末期の衰退を見て取り、中華への侵攻を激化させる事もあったが、その際、匈奴や突厥は、滅亡した前漢や隋の皇族（盧芳や楊正道）を漢皇帝や隋王に擁立し、中華へ強く干渉を試みる事もあった。更に、安史の乱後、史朝義は、玄宗と粛宗の崩御を契機にウイグルに入寇を教唆している。皇帝の代替わりは、反乱軍や周辺諸国にとって攻撃の好機と見なされたのであろう。また、ウイグルなどの周辺国にとって、中華の皇帝との盟約は、その皇帝一代限りの約束事であり、新皇帝が即位した場合には、改めて盟約や同盟を交わすものと認識されていたのかも知れない。

おわりに

最後に、本稿で検討した漢代から唐代の「小外交」の傾向を簡単にまとめ、本稿を締め括りたいと思う。

（一）中華王朝から周辺諸国への小外交

最初に、中華から周辺への小外交とその成否をまとめる（表2参照）。匈奴・突厥などの北方遊牧政権は強大な勢力を有し、時に中華を圧迫したが、その政治形態は概ね部族長が各地に割拠する分立的な政権であるため、内訌も生じやすかった。内訌勃発の際、弱小勢力や敗者が中華に助力を乞う事が多く、中華は、こうした非中心勢力を軍勢派遣も伴いつつ支援して内紛を更に煽り、匈奴や突厥を分裂あるいは服従させ、討滅した。このような周辺国に対する中華王朝の「以夷制夷」の政策の成功例としては、前漢による匈奴の東西分裂、後漢による匈奴の南北分裂、隋による突厥の東西分裂、唐による東突厥討滅などが挙げられ、中華では漢から唐まで王朝が変わっても状況に応じて同じような外交政策が採用されている。

しかし、中華側が周辺に仕掛ける「以夷制夷」の外交政策は、軍事力や国力を伴ってこそ効力を発揮できる。実際、

王莽による五度の単于擁立は、派兵を伴わなかった事や赤眉の乱後の国力衰微などにより、いずれも失敗した。また、三度の高句麗遠征に失敗後、煬帝が東突厥に実施した離間策（可汗の弟の冊立計画）も、失敗したのみならず、怒った突厥可汗の襲撃により煬帝自身が包囲され窮地に陥る事態をも招き寄せた。つまり、中華から北方遊牧政権に仕掛ける分断策も、軍事力や国力を欠くと逆に強大な遊牧政権の怒りを買い、入寇の激化を招き、その結果、中華王朝の側が衰退・滅亡に至る事態にもなりかねないため、この政策は中華にとり諸刃の剣であったとも言えよう。

（二）周辺諸国から中華への小外交

（1）小外交が活発化する時期

第二章では、周辺諸国から中華に対して行われた小外交を取り上げたが、大まかに、その傾向を挙げると、中華が統一王朝であっても、反乱や王朝交代などで混乱し、弱体化すると、北方遊牧政権や吐蕃が中華王朝内の分立政権と連繋し、軍隊を派遣して辺境地帯などを襲撃する事例がよく見られる（表2参照）。

後漢初期と隋末唐初の状況や推移は、よく似ている。まず中華が混乱し、群雄割拠の状態になると、北辺の群雄に対して、匈奴や突厥が援軍の派遣や前王朝の遺児を擁立するなどの小外交を仕掛けてくる。しかし、その後、後漢、あるいは唐は、群雄を鎮定し、中華を統一すると、第一章で見た通り、匈奴や突厥に対し、軍事力の行使と並行して小外交も巧妙に用い、反撃に転じている。後漢は単于達の対立に乗じて匈奴を南北に分裂させ、唐は可汗同士の対立を機に、東突厥を討滅した。

なお、後漢や唐が建国時に匈奴や突厥の干渉を被り苦闘した例と比較すると、隋は建国当初、突厥から後漢や唐ほど大きな打撃を受けていない。その理由の一つは、隋の建国期、突厥で大可汗の他鉢可汗が死去し、後継の座を巡る内紛が勃発していた点にあろう。突厥は内訌状態にあったため、隋に干渉する余力がなかったのである。むしろ隋が突厥の内紛を巧く利用し、遠交近攻で可汗達を離間させ、東西に分裂させている。

また、皇帝の崩御を契機に反乱勢力が周辺諸国に入寇を教唆する事もあった。例えば、安史の乱の時、史朝義は玄宗と粛宗が相次いで崩御すると、ウイグルに入寇を促した。反乱勢力や周辺国は、皇帝の代替わりを攻撃の好機と見たようである。あるいは、ウイグルなどの周辺諸国にとって、盟約や同盟は一代限りのものであり、盟約を交わした皇帝が死去した場合、同盟関係や和睦も消滅したと解釈されたのかも知れない。

(2) 小外交の地理的傾向

周辺諸国が、中華内の勢力と交渉する際、隣接している事が重要な条件であったように見受けられる。事実、【地図】と【表1】を見ると、匈奴・突厥・ウイグル・吐蕃・東越などの周辺国家は、隣接地域の群雄や反乱勢力と交渉・連合する傾向が強い。当然ながら、近接する勢力と交渉しやすく、また、中華内の地方勢力にとって、安全保障の点からも、近接する周辺諸国との交渉は重要であった。周辺諸国は、中華内勢力と連繋する場合、近隣勢力と結ぶ事例がほとんどであるが、逆に、中華内にある遠方の勢力と周辺国家が通好しにくいようである。例えば、吐蕃は安史の乱以降、河西・隴右を占領したが、安史勢力や、その後継となる河北三鎮と連繋する事はなかった。吐蕃は、安史勢力や河北三鎮の勢力圏である河北とは地理的に遠く離れており、連合が困難だったと思われる(46)。

これとは対照的に、中華側は、例えば、隋が突厥に対して行った「遠交近攻」策のように、遠方にある勢力と交渉・連繋して、突厥の大可汗に揺さぶりをかけている。

本稿では、漢から唐までを考察の対象とし、中華王朝側と周辺諸国側の双方について、敵対国の非中心勢力と結ぶ「小外交」の様相を見てきた。しかし、こういった「小外交」という形態は、北宋による中華統一を機に顕著には見られなくなり、実質的には消滅したと考えられる。これは、宋代以降の漢人王朝では、皇帝権の強化に伴う著しい中央集権化の結果、藩鎮などの非中心勢力が消滅した事、北方勢力側の遼・金などでも中央集権的な「帝国化」が進み、皇帝と他の有力者との力の差が歴然とした事などを反映した事象であろう。例えば、宋代では、宋王朝も、その周辺強国である遼・金・西夏も、顕著な国内非中心勢力を持たず、従って、有効な政策としての小外交は事実上無くなり、外交の形態

も「澶淵の盟」などに象徴される国家間の外交のみが基調のシンプルな構図になったと考えられる。こういった観点での、唐代までの外交形態と宋代の外交との比較は、興味深い課題の一つと思われる。

註

（1）内田吟風『北アジア史研究・匈奴篇』（同朋舎、一九七五年）、沢田勲『匈奴（新訂版）』（東方書店、二〇一五年。初版は一九九六年）、護雅夫「突厥と隋唐両王朝」（『古代トルコ民族史研究』一、一九六七年、山川出版社）、石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』（汲古書院、一九九八年）、松田寿男『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』（早稲田大学出版部、一九七〇年。初版は一九五六年）、内藤みどり『西突厥史の研究』（早稲田大学出版部、一九八八年）、羽田亨「唐代回鶻史の研究」（『羽田博士史学論文集』上・歴史篇、東洋史研究会、一九五七年）、林敏雄「ウイグルの対唐政策」（『創価大学人文論集』四号、一九九二年三月）、山口瑞鳳『吐蕃王国成立史研究』（岩波書店、一九八三年）、佐藤長『古代チベット史研究』上下巻（同朋舎、一九七七年。初版は一九五八年～一九五九年）など。

（2）陳寅恪『唐代政治史述論稿』（上海古籍出版社、一九九七年。初版は一九四四年）、古畑徹「七世紀末から八世紀初にかけての新羅・唐関係――新羅外交史の一試論」（『朝鮮学報』一〇七号、一九八三年四月）、堀敏一『中国と古代東アジア世界――中華的世界と諸民族』（岩波書店、一九九三年）、金子修一『隋唐の国際秩序と東アジア』（名著刊行会、二〇〇一年）、日野開三郎「唐代の和蕃公主」（『東洋史学論集』九巻、三一書房、一九八四年）、藤野月子『王昭君から文成公主へ――中国古代の国際結婚』（九州大学出版会、二〇一二年）、川本芳昭『魏晋南北朝時代の民族問題』（汲古書院、一九九八年）、森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』（関西大学出版部、二〇一〇年）など。

（3）森安孝夫『東西ウイグルと中央ユーラシア』（名古屋大学出版会、二〇一五年）、岩尾一史「古代チベット帝国の外交と「三国会盟」の成立」（『東洋史研究』七二巻四号、二〇一四年三月）、拙著『七世紀後半から八世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移――唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に』（渓水社、二〇一三年）など。

（4）『隋書』巻八三吐谷渾伝、『資治通鑑』巻一八一。拙稿「隋の東部ユーラシア規模での世界戦略――北方と西方への遠交近攻、以夷制夷の対外政策」（『史窓』七四号、二〇一七年二月）五五～五六頁。

（5）『隋書』巻八四西突厥伝、『資治通鑑』巻一八一。前掲註（4）拙稿［二〇一七］五三頁。

（6）『漢書』巻九四匈奴伝。前掲註（1）沢田勲［二〇一五］、林敏雄『スキタイと匈奴・遊牧の文明』（講談社、二〇一七年。初版は二〇〇七年）参照。

（7）『後漢書』巻八九南匈奴伝。前掲註（1）内田吟風［一九七五］、前掲註（1）沢田勲［二〇一五］、前掲註（6）林敏雄［二〇一七］。

（8）『隋書』巻五一長孫晟伝、巻八四突厥伝、『資治通鑑』巻一七五。前掲註（1）松田寿男［一九七〇］、前掲註（1）護雅夫［一九六七］、前掲註（4）拙稿［二〇一七］。

（9）『隋書』突厥伝、『旧唐書』巻一九四突厥伝、『新唐書』巻二一五突厥伝。前掲註（1）護雅夫［一九六七］、氣賀澤保規「寶建徳集団と河北――隋唐帝国の性格をめぐって」（『東洋史研究』三一巻四号、一九七三年三月）。

（10）『隋書』巻五九斉王暕伝、『旧唐書』『新唐書』突厥伝、『資治通鑑』巻一八八。石見清裕「突厥の楊正道擁立と第一帝国の解体」（前掲註（1）石見清裕［一九九八］所収）。なお、正道は政道とも表記される。

（11）『旧唐書』巻一九五迴紇伝、『新唐書』巻二一七回鶻伝、『資治通鑑』巻二二〇、巻二二二。

（12）前掲註（4）拙稿［二〇一七］。

（13）『漢書』巻八宣帝紀、巻九元帝紀、匈奴伝、『資治通鑑』巻二七、巻二九。前掲註（1）沢田勲［二〇一五］、前掲註（6）林敏雄［二〇一七］。

（14）『漢書』匈奴伝、巻九九王莽伝、『資治通鑑』巻三七。

（15）『漢書』匈奴伝、王莽伝、『資治通鑑』巻三八。

（16）『後漢書』南匈奴伝。前掲註（1）内田吟風［一九七五］、前掲註（1）沢田勲［二〇一五］、前掲註（6）林敏雄［二〇一七］。

（17）前掲註（4）拙稿［二〇一七］。

（18）『旧唐書』『新唐書』突厥伝。

(19)『旧唐書』『新唐書』突厥伝、『資治通鑑』巻一九一、『冊府元亀』巻九八一外臣部盟誓・武徳七年八月条。
(20)『旧唐書』『新唐書』突厥伝。
(21)『史記』巻五〇楚元王世家、巻一〇六呉王濞伝、巻一一〇匈奴伝。
(22)『史記』呉王濞伝。
(23)『史記』呉王濞伝、巻一一四東越伝。
(24)『後漢書』南匈奴伝。内田吟風「後漢光武帝の対南匈奴策に就て（上）匈奴分裂以前の後漢・匈奴の交渉」（『史林』十七巻四号、一九三二年十月）参照。
(25)『後漢書』巻一光武帝紀、巻十二彭寵伝、巻十九耿弇伝、『資治通鑑』巻四一。
(26)『後漢書』光武帝紀、巻十二盧芳伝、巻二十王覇伝、巻二二杜茂伝、南匈奴伝、『資治通鑑』巻四二。
(27)『後漢書』光武帝紀。西嶋定生『秦漢帝国』（講談社、一九九七年、初版は一九七四年）参照。
(28)『後漢書』光武帝紀、盧芳伝、『資治通鑑』巻四三。
(29)『旧唐書』巻五五劉武周伝、巻五六梁師都伝、李子和伝、突厥伝、『資治通鑑』巻一八三。
(30)『旧唐書』巻五七劉文静伝、『資治通鑑』巻一八四。
(31)註（10）参照。
(32)『旧唐書』『新唐書』突厥伝。
(33)『周書』巻五〇突厥伝、『隋書』突厥伝。
(34)周藤吉之、中嶋敏『五代と宋の興亡』（講談社、二〇〇四年、初版は一九七四年）。
(35)『旧唐書』迴紇伝、『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』巻二二二。森安孝夫「ウイグルから見た安史の乱」（前掲註（3）森安［二〇一五］所収、初出は二〇〇二年）、前掲註（3）拙著［二〇一三］第6章参照。
(36)『旧唐書』迴紇伝、『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』巻二二二、巻二二三。
(37)『旧唐書』巻一二一僕固懐恩伝、迴紇伝、巻一九六吐蕃伝、『新唐書』巻二一六吐蕃伝、回鶻伝、巻二二四僕固懐恩伝、『資治通鑑』

巻二二三。

(38)『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝。前掲註(1)佐藤長〔一九七七〕五一八～五四〇頁。

(39)前掲註(1)佐藤長〔一九七七〕五六四頁。

(40)『資治通鑑』巻二二九、巻二三一。前掲註(3)拙著〔二〇一三〕第7章。

(41)『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』巻二二六。

(42)『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』巻二三〇、巻二三一。拙稿「徳宗時代の三つの唐・吐蕃会盟（建中会盟・奉天盟書・平涼偽盟）――安史の乱後の内治のための外交」（『史窓』六八号、二〇一一年二月）、前掲註(3)拙著〔二〇一三〕第7章。

(43)『新唐書』巻七憲宗紀、『資治通鑑』巻二三七。

(44)『文苑英華』巻六一五あるいは『全唐文』巻六二六の「代李侍郎論兵表」、『冊府元亀』巻三五九・将帥部立功十二・高崇文。拙稿「九世紀前半の東部ユーラシア情勢と唐の内治のための外交――吐蕃との長慶会盟、ウイグルへの太和公主降嫁の背景」（『史窓』七三号、二〇一六年二月）二二頁註十参照。

(45)『資治通鑑』巻二三七。前掲註(44)拙稿〔二〇一六〕参照。

(46)前掲註(44)拙稿〔二〇一六〕五頁。

【年表１】前漢・新・後漢における中華王朝と周辺諸国（匈奴・東越）の小外交

	年　代	小外交と関連事項	小外交などの内容と詳細
前漢	高祖７年(前200)	戦争と和睦	白登山の戦い。漢は匈奴に敗北し，和睦
	景帝３年(前154)	**小外交**：匈奴・東越→前漢	呉楚七国の乱。東越が呉に援軍を派遣。趙王遂も匈奴に対し連合して漢を攻撃しようと提案。匈奴も出兵を画策するが，漢軍が邯鄲を包囲したため出撃を断念
	五鳳元～２(前57～前56)頃	匈奴の内紛	匈奴で五単于が分立するが，呼韓邪単于が他の単于を統合
	五鳳４(前54)	匈奴の内紛	致支単于（呼韓邪の兄）が呼韓邪を撃破し，単于庭に都を置く
	甘露３(前51)	前漢の**小外交**の成功	正月，呼韓邪単于が入朝
	甘露４(前50)	**小外交**：前漢→匈奴	呼韓邪単于と致支単于が各々使者を入朝奉献。漢は呼韓邪の使者を厚遇
	建昭３(前36)	**小外交**：前漢→匈奴	西域都護の甘延寿が致支単于を攻撃し殺害
新	始建国元(９)	外交	王莽が新を建国。匈奴に遣使し，漢の授けた匈奴単于璽を新匈奴単于章と交換し降格
	始建国２(10)	**小外交**：新→匈奴	王莽は匈奴を分断するため，呼韓邪単于の子孫15人を単于に擁立しようと画策
	始建国３(11)	**小外交**：新→匈奴	王莽は，右犁汗王の咸（呼韓邪の息子）を孝単于，咸の息子助を順単于に各々擁立するが，匈奴の烏珠留単于が激怒し新に入寇
	天鳳５(18)	**小外交**：新→匈奴	王莽が須卜当を単于（須卜単于）に擁立。この年，赤眉の乱が勃発
	天鳳６(19)	**小外交**：新→匈奴	王莽が呼都而尸単于の誅殺と須卜単于の匈奴単于への推戴を計画。匈奴への大軍派遣を画策するが軍備が整わず
	地皇２(21)	**小外交**：新→匈奴	須卜単于が死去。王莽は須卜単于の息子奢に自分の娘陸逸任を嫁がせ，軍勢派遣し奢を匈奴単于に推戴する事も計画
	地皇４・更始元(23)	中華の混乱	９月，王莽が殺害され新が滅亡
後漢	建武３(27)	中華の混乱	彭寵が薊城を陥落させ燕王を自称。この年，赤眉軍が光武帝に降伏
	建武５(29)	**小外交**：匈奴→後漢	呼都而尸単于が盧芳を匈奴に迎え漢皇帝に擁立。その後，盧芳を帰国させ五原郡の九原縣を都となす
	建武６(30)	**小外交**：匈奴→後漢	光武帝は匈奴に劉颯を派遣し和親を請願。盧芳の将賈覧が匈奴騎兵を率い代郡太守の劉興を攻め殺す
	建武９(33)	**小外交**：匈奴→後漢	６月，大司馬の呉漢が盧芳の将賈覧を高柳（山西省）で攻めるが，匈奴騎兵が賈覧を掩護したため敗北。８月，驃騎大将軍の杜茂が繁畤（山西省）で盧芳の将尹由を攻めるが，賈覧が匈奴の一万餘を率い，杜茂軍を撃破
	建武10(34)	**小外交**：匈奴→後漢	正月，呉漢が高柳で賈覧・匈奴連合軍を撃破
	建武12(36)	関連事項	盧芳が匈奴に亡命。その後一旦帰還するも建武18(42)再度匈奴に亡命
	建武24(48)	**小外交**：後漢→匈奴	匈奴の日逐王比が後漢に帰順（匈奴が南北に分裂）

【年表2】隋唐における中華王朝と周辺諸国（突厥・ウイグル・吐蕃など）の小外交

	年　代	小外交と関連事項	小外交などの内容と詳細
隋	開皇元（581）	**小外交**：隋→突厥	2月，隋の建国。文帝は突厥を離間するため，達頭可汗，処羅侯らに遣使し懐柔を画策
	開皇2（582）	**小外交**：隋→突厥	突厥の大可汗・沙鉢略可汗が40万騎を率い大規模に入寇するが，文帝に懐柔された達頭可汗が撤退
	開皇3（583）	隋の**小外交**の成功	隋が阿波可汗に遣使し撤退させたため，沙鉢略可汗は激怒し阿波の領地を襲撃。阿波は達頭可汗のもとに亡命。これにより突厥が東西に分裂する
	開皇9（589）	中華の統一	隋が陳を討滅【隋による中華再統一】
	開皇17（597）	**小外交**：隋→突厥	大可汗の都藍可汗に対抗させるため，文帝は弱小の染干に安義公主を降嫁させ懐柔。都藍可汗は怒り，朝貢を停止し，頻繁に入寇
	開皇19（599）	**小外交**：隋→突厥	4月，染干が入朝（都藍可汗に敗北し隋に亡命）。10月，文帝が染干を啓民可汗に冊立。12月，文帝が都藍可汗への討伐軍を出動させると，都藍可汗が部下に弑殺される
	仁寿3（603）	隋の**小外交**の成功	達頭可汗が敗北し吐谷渾に亡命。親隋の啓民可汗が餘衆を糾合し東突厥の可汗となる
	大業6頃～7（610頃～611）	**小外交**：隋→西突厥	西突厥の射匱可汗が煬帝に通婚を請願。煬帝が泥撅処羅可汗の殺害を通婚の条件に提示すると，射匱可汗が泥撅処羅可汗を撃破。泥撅処羅可汗は隋に亡命
	大業8～10（612～614）	中華の外征失敗	煬帝の3次の高句麗遠征とその失敗
	大業11（615）	**小外交**：隋→突厥	煬帝が始畢可汗の弟叱吉設に離間策を仕掛けるが失敗。始畢可汗は怒り，数十万騎を率い煬帝を雁門（山西省）で包囲
	大業13（617）	**小外交**：突厥→隋	2月，梁師都が大宰相を自称し突厥と連繋。劉武周が太守を自称し，突厥軍と連合し隋軍を撃破。5月，李淵が太原で挙兵。6月，李淵が劉文静を突厥に派遣し援軍要請。11月，李淵が恭帝（煬帝孫）を擁立
唐	武徳元（618）	中華の王朝交代	3月，煬帝が殺害される。5月，李淵が唐を建国
	武徳2（619）	**小外交**：突厥→唐	2月，始畢可汗が夏州（陝西省）に到来し梁師都と合流。可汗は劉武周に五百餘騎を授け句注（山西省）から太原への侵攻を画策。4月，劉武周が突厥軍を率い黄蛇嶺に駐屯
	武徳3（620）	**小外交**：突厥→唐	処羅可汗が楊正道（煬帝孫）を隋王に擁立し，定襄（内蒙古自治区）に隋の亡命政権を樹立
	武徳4（621）	**小外交**：突厥→唐	頡利可汗が苑君璋と共に雁門を攻撃
	武徳5（622）	**小外交**：突厥→唐	劉黒闥が突厥軍と新城を包囲。6月，劉黒闥が突厥の1万餘騎を率い黄河の北に侵攻
	武徳7（624）	**小外交**：唐→突厥	頡利可汗の大規模な入寇。秦王李世民が突利可汗（頡利の甥）と兄弟の盟約締結
	貞観3（629）	**小外交**：唐→突厥	突利可汗，郁射設、薛奈特勤らが，配下を率い唐に亡命
	貞観4（630）	中華の外征の成功	唐軍が東突厥を討滅

	年　代	小外交と関連事項	小外交などの内容と詳細
唐	天寶14（755）	中華の大混乱	安史の乱が勃発
	宝応元（762）	**小外交**：ウイグル→唐	４月，玄宗と粛宗が相次いで崩御し，史朝義がウイグルに入寇教唆。ウイグルは史朝義に応じ単于都護府を襲撃するが，新皇帝の代宗はウイグルを説得し，連合して史朝義を撃破
	広徳元（763）	中華の内乱終結	安史の乱が終息
	広徳２（764）	**小外交**：吐蕃・ウイグル→唐	僕固懐恩が反乱。吐蕃，ウイグルと連合し十万の軍勢を率いて邠州・奉天等を攻撃
	永泰元（765）	**小外交**：吐蕃・ウイグル等→唐	僕固懐恩が吐蕃・ウイグル・党項・羌・渾・奴剌の二十餘万の軍勢を率い奉天・鳳翔等を攻撃。９月，懐恩が病死し，吐蕃とウイグルが指揮権を巡り対立。唐の郭子儀はウイグルと連合し吐蕃を撃退
	建中２（781）	中華の混乱	成徳・魏博・平盧・山南東道が連合して反乱
	建中３（782）	中華の混乱	盧龍・成徳・魏博・平盧・淮西が反乱
	建中４（783）	**小外交**：ウイグル→唐	10月，長安で朱泚の乱勃発。徳宗は奉天に逃亡。12月，盧龍節度使の朱滔（朱泚弟）が范陽の歩騎五万，ウイグル軍三千等を率いて河間（河北省）を発し南下を開始
	興元元（784）	**小外交**：ウイグル→唐，吐蕃→唐	正月，朱滔が貝州（河北省）を攻撃。朱滔麾下のウイグル軍は諸縣を略奪。４月，唐軍と吐蕃軍が武功武亭川（陝西省）で朱泚軍を撃破。５月，吐蕃が朱泚の贈賄を受け取り撤退。５月，王武俊が朱滔を撃破。朱滔麾下のウイグル軍は敗走。６月，朱泚の乱平定
	元和元（806）	**小外交**：吐蕃→唐	剣南西川節度使劉闢が吐蕃と通好。正月，四川で劉闢の乱が勃発。９月，劉闢は唐軍に敗北後，吐蕃への逃亡を図るが唐軍に捕縛され刑死

【表１】周辺諸国と連合した中華の群雄・反乱勢力の蜂起の時期・主な拠点・交渉相手

時期	群雄・反乱者	蜂起の時期	主な拠点・活動領域	地図	交渉相手	典拠
前漢	呉王濞	景帝３年（前154）	呉（江蘇）	地図A①	東越	史106呉王濞伝
前漢	趙王遂	景帝３年（前154）	趙（山西・河北）	地図A②	匈奴	史110匈奴伝，漢94匈奴伝，後12盧芳伝，彭寵伝
後漢	盧芳	建武元～建武18（25～42）	五原（内蒙古自治区）	地図A③	匈奴	史110匈奴伝，漢94匈奴伝，後12盧芳伝，彭寵伝
後漢	彭寵	建武２～建武５（26～29）	薊・涿郡（河北）	地図A④	匈奴	史110匈奴伝，漢94匈奴伝，後12盧芳伝，彭寵伝
隋末唐初	竇建徳	大業12～武徳４（616～621）	河北・山東	地図B①	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
隋末唐初	高開道	大業12～武徳７（617～624）	魚陽（河北）	地図B②	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
隋末唐初	李淵	大業13～武徳元（617～618）	太原	地図B③	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
隋末唐初	薛挙	大業13～武徳元（617～618）	隴西	地図B④	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
隋末唐初	李軌	大業13～武徳４（617～621）	河西	地図B⑤	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
隋末唐初	劉武周	大業13～武徳５（617～622）	山西	地図B⑥	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
隋末唐初	苑君璋	大業13～貞観元（617～627）	山西	地図B⑦	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
隋末唐初	梁師都	大業13～貞観２（617～628）	朔方	地図B⑧	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
隋末唐初	王世充	武徳元～武徳４（618～621）	洛陽・河南	地図B⑨	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
隋末唐初	楊正道	武徳３～貞観４（620～630）	定襄（内蒙古自治区）	地図B⑩	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
隋末唐初	劉黒闥	武徳４～武徳６（621～623）	河北・河南	地図B⑪	突厥	隋84突厥伝，旧54竇建徳伝，王世充伝，55高開道伝，薛挙伝，李軌伝，劉武周伝，苑君璋伝，劉黒闥伝，56梁師都伝，57劉文静伝，194突厥伝，新215突厥伝，通183，184，187，190
唐・安史の乱後	史朝義	上元２～広徳元（761～763）	洛陽・河北	地図C①	ウイグル	旧195迴紇伝，通222
唐・安史の乱後	僕固懐恩	広徳２～永泰元（764～765）	霊武（寧夏回族自治区）	地図C②	吐蕃・ウイグル・党項・羌・渾（吐谷渾）・奴剌	旧121僕固懐恩伝，195迴紇伝，196吐蕃伝，通223
唐・安史の乱後	朱滔	建中３～興元元（782～784）	河北	地図C③	ウイグル	通229，231
唐・安史の乱後	朱泚	建中４～興元元（783～784）	長安	地図C④	吐蕃	通230，231
唐・安史の乱後	劉闢	元和元（806）	四川	地図C⑤	吐蕃	通237

※略号：史＝『史記』、漢＝『漢書』、後＝『後漢書』、隋＝『隋書』、旧＝『旧唐書』、新＝『新唐書』、通＝『資治通鑑』。

※隋末唐初の群雄については氣賀澤保規「竇建徳集団と河北―隋唐帝国の性格をめぐって」（『東洋史研究』31巻４号、1973年）も参照し作成。

※【表１】は【地図A】【地図B】【地図C】に対応するため【地図】も参照されたい。

【表２】漢代から唐代の中華王朝（前漢・新・後漢・隋・唐）と周辺諸国（匈奴・突厥・ウイグル・吐蕃など）の小外交

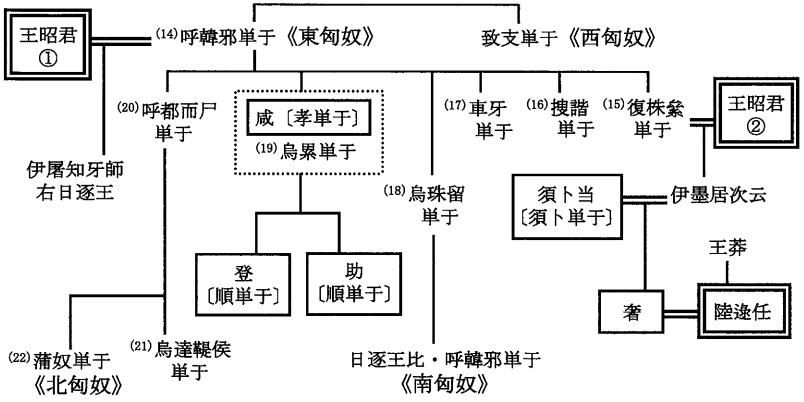
王朝	しかけた国家	しかけられた国家	年代	小外交の内容	小外交の成否・その後の展開	典拠
前漢	匈奴	前漢	景帝３年（前154）	呉楚七国の乱の時，趙王遂が匈奴に遣使し，連合して漢を攻撃しようと持ちかけ，匈奴もこれに応じて出兵を画策	匈奴は趙との連繋を試みたが，漢軍が邯鄲を７か月間包囲したため出撃せず	史50楚元王世家，106呉王濞伝，110匈奴伝
	東越	前漢	景帝３年（前154）	呉楚七国の乱の時，呉王濞が東越に遣使し派兵を要請。東越はこれに応じ援軍を派遣し呉王軍と共に挙兵	呉王が漢軍に敗北し東越に逃げると，東越は呉王を殺し漢の処罰を免れる	史106呉王濞伝，114東越伝
	前漢	匈奴	五鳳４～建昭３（前54～前36）	匈奴で呼韓邪単于と兄の致支単于が対立。漢が呼韓邪を支援したため，致支単于は西方に移動（匈奴の東西分裂）	西域都護の甘延寿が致支単于を攻撃し殺害。呼韓邪は漢に帰順し，以後約60年間入寇せず	漢94匈奴伝
新	新	匈奴	始建国２～４（10～12），天鳳５～６（18～19），地皇２（21）	王莽は匈奴を分断するため，５人の単于（孝単于の咸，順単于の助，順単于の登，須卜単于の当，奢）を擁立	匈奴の入寇激化や赤眉の乱勃発などにより，王莽による単于擁立作戦はいずれも失敗に終わる	漢94匈奴伝，99王莽伝
後漢	匈奴	後漢	建武２～建武18（26～42）頃	匈奴が河北の彭寵や五原の盧芳を支援し，派兵して幾度か後漢軍を撃破。匈奴は盧芳を漢皇帝に擁立	彭寵は後漢軍に敗北後，暗殺される。盧芳は匈奴に亡命後，病死。	後１光武帝紀，12盧芳伝，彭寵伝
	後漢	匈奴	建武24（48）	匈奴で単于位を巡る内紛が勃発し，建武24（48）日逐王比が後漢に帰順	匈奴が南北に分裂。後漢は永元元（89）南匈奴と連合し北匈奴を撃破	後89南匈奴伝
隋	隋	突厥	開皇元～開皇３（581～583）	文帝が遠交近攻策により達頭可汗，阿波可汗らを懐柔し，大可汗の沙鉢略可汗に対抗させ突厥の離間を画策	開皇３（583）沙鉢略と阿波が対立。阿波が達頭のもとに亡命し突厥が東西に分裂	隋51長孫晟伝，84突厥伝，通175
		突厥	開皇17（597）～仁寿３（603）	文帝が染干に公主を降嫁させ懐柔。その後，文帝は染干を啓民可汗に冊立・支援し，都藍可汗，達頭可汗を順次排斥	隋は啓民可汗を東突厥の傀儡可汗となし北辺の脅威を取り除く	隋84突厥伝，通178，179
		西突厥	大業６（610）頃	西突厥の大可汗・泥撅処羅可汗に対抗させるため，煬帝は一貴長の射匱可汗に対し通婚と可汗への冊立を提案	射匱可汗が泥撅処羅可汗を撃破。泥撅処羅は煬帝のもとに亡命	隋84西突厥伝，通181
		東突厥	大業11（615）頃	煬帝が始畢可汗の弟叱吉設に対し，公主の降嫁と南面可汗への冊立を提案し，兄弟対立を画策	叱吉設が隋の提案を拒否し，隋による東突厥離間作戦は失敗	通182
隋・唐	突厥	隋および唐	大業13～貞観４（617～630）	突厥が河北・山西等の群雄を支援し中華の混乱を助長。例えば，梁師都と劉武周に可汗と天子の称号を授け，援軍を与えて支援し，煬帝の孫楊正道も隋王に擁立	貞観４（630）唐が東突厥を討滅	隋84突厥伝，旧55劉武周伝，56梁師都伝，194突厥伝等

王朝	しかけた国家	しかけられた国家	年代	小外交の内容	小外交の成否・その後の展開	典拠
唐	唐	東突厥	武徳7～貞観4（624～630）	武徳7（624）頡利可汗の入寇時，李世民は突利可汗（頡利の甥）と兄弟の契りを交わし東突厥攻略のための布石を打つ	貞観3（629）突利可汗が唐に投降。頡利可汗は孤立し，貞観4（630）唐に討滅される	旧2太宗紀，194突厥伝，通191，冊981
	ウイグル	唐	宝応元（762）	宝応元（762）玄宗と粛宗が相次いで崩御すると，史朝義はウイグルに入寇教唆。牟羽可汗は十万の軍を率い単于都護府を略奪	代宗は僕固懐恩（牟羽可汗の舅）に可汗を説得させ，連合して史朝義を破り洛陽奪還。史朝義を河北に追撃し，安史の乱を終息させる	旧195廻紇伝，新217回鶻伝，通222
	吐蕃・ウイグル	唐	広徳2（764）	僕固懐恩の乱の際，吐蕃・ウイグルが懐恩に援軍派遣。邠州等を攻撃	郭子儀が反撃し，僕固懐恩の軍を退ける	旧121僕固懐恩伝，195廻紇伝，196吐蕃伝，新224僕固懐恩伝，通223
	吐蕃・ウイグル・党項・羌・渾・奴剌	唐	永泰元（765）	僕固懐恩が入寇を促すと吐蕃・ウイグル・党項・羌・渾（吐谷渾）・奴剌の二十万餘の軍勢が奉天等に襲来	懐恩の急死後，吐蕃とウイグルが対立。郭子儀はウイグルと連合し吐蕃軍を撃破。羌・渾も唐の李抱玉に降伏	
	ウイグル	唐	建中4～興元元（783～784）	盧龍節度使の朱滔が反乱を起こすと，ウイグルは援軍を派遣。朱滔はウイグル兵も率い河北の諸縣を略奪	興元元（784）5月，唐軍が朱滔を撃破。朱滔麾下のウイグル兵も敗走	通229，231
	吐蕃	唐	興元元（784）	朱泚の乱の時，吐蕃は唐と盟約（奉天盟書）を交わし唐軍と連合し朱泚軍を撃破するが，朱泚が金帛を贈ると撤退	唐は単独で朱泚を撃破・鎮定	通230，231
	吐蕃	唐	元和元（806）	四川の剣南西川節度使・劉闢が吐蕃と通好。元和元（806）正月，劉闢が反乱を起こす	元和元（806）9月，劉闢が唐軍に敗北し，吐蕃への亡命を図るが唐軍に捕まり刑死	通237，冊359，文615，全626

※略号：史＝『史記』、漢＝『漢書』、後＝『後漢書』、隋＝『隋書』、旧＝『旧唐書』、新＝『新唐書』、通＝『資治通鑑』、冊＝『冊府元亀』、文＝『文苑英華』、全＝『全唐文』

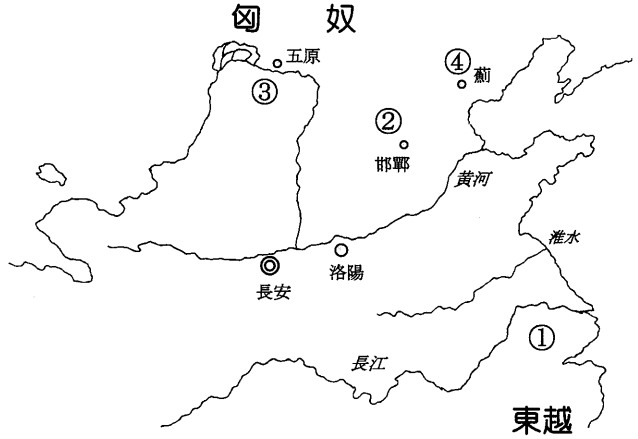
【系図】匈奴単于（14代目呼韓邪単于から22代目蒲奴単于まで）の系図（前58年頃～後46年頃）：

(14)…(22)は単于位の継承順位。四角の人物は王莽が擁立。〔 〕内の単于名は王莽が命名。点線四角の烏累単于・咸・孝単于は同一人物。二重四角の王昭君は漢の和蕃公主、陸逸任は新の皇帝の娘。王昭君はレヴィレート婚により、呼韓邪単于の死後、息子の復株絫単于と再婚したので、最初の結婚を①、再婚を②で示した。

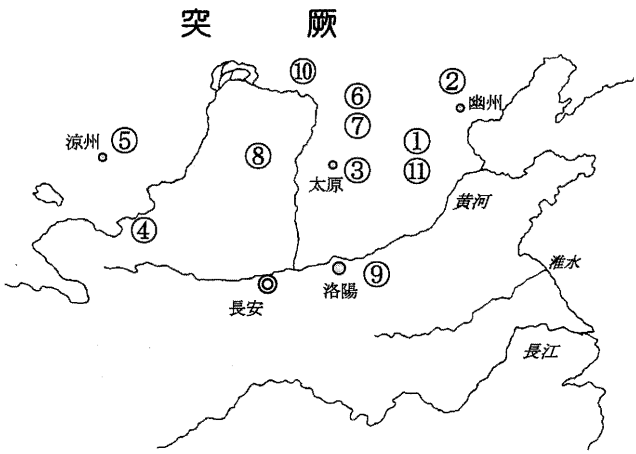


【地図】周辺諸国と交渉した中華内の群雄や反乱者の活動地域

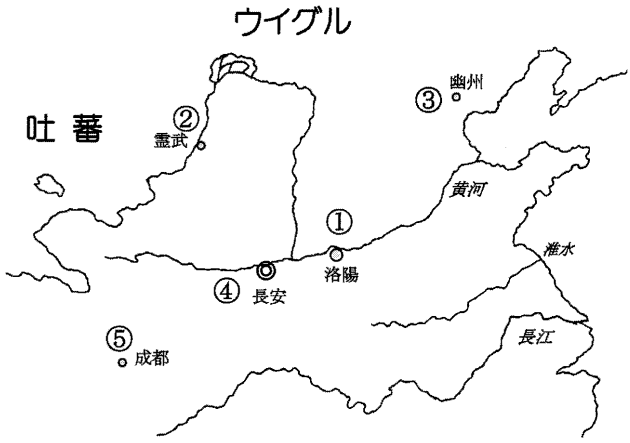
※地図Ａの①～④、地図Ｂの①～⑪、地図Ｃの①～⑤は【表１】に対応する。地図Ａは西嶋定生『秦漢帝国』（講談社、1997年）、地図Ｂは氣賀澤保規『絢爛たる世界帝国・隋唐時代』（講談社、2005年）も参照し作成。



地図Ａ：前漢・後漢期に周辺諸国（匈奴・東越）と交渉した中華内の群雄や反乱勢力の活動地域



地図Ｂ：隋末唐初に突厥と交渉した群雄の活動地域



地図Ｃ：唐代・安史の乱以後に周辺諸国（吐蕃・ウイグル）と交渉した中華内の反乱勢力の活動地域